学問 文化

プロテストソングとは何か

韓国の「非常戒厳政局」に見る

金成玟

プロテストソングとは、社会・政治的な批判や抵抗の意思を表明する、あるいは変革を求める歌をいうが、その意味はすでに辞典の定義から遠く離れ、いまもなおダイナミックに変化している。

昨年12月3日に始まった韓国の「非常戒厳政局」は、その象徴的な事例だ。国会による尹錫悦（ユンソンニョル）大統領に対する弾劾訴追案の議決、逮捕、憲法裁判所による罷免。韓国という国の運命を左右する重大局面で最大の力を発揮したのは、連日国会前や街に集まり、非常戒厳令に抗議し、弾劾や真相究明を求め続けた市民の声だった。

その声を一つに束ねたのは、他でもない歌である。元トップアイドルグループ少女時代の〈また巡り逢（あ）えた世界（Into The New World）〉をはじめとするK-POPの歌が、韓国プロテストソングの代名詞とも言われる〈朝露（アサツユ）〉や〈あなたのための行進曲〉とともに、連日国会周辺に響き渡った。なぜ、もっとも商業的な音楽であるK-POPアイドルの曲が、もっとも政治的な場で歌われたのか。

キム・ソンミン　1976年ソウル生まれ。ソウル大学作曲科卒業、東京大学博士課程修了。北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授。著書に『日韓ポピュラー音楽史』『K-POP　新感覚のメディア』

闘う主体として

〈あなたのための行進曲〉は、1980年の「光州事件」で軍事政権によって犠牲となった人々を悼むために作られた歌である。追悼にとどまらず、生き残った者たちがその精神を受け継ぎ、民主主義へと歩み続けることを促すこの曲は、まさにプロテストソングの典型である。この曲が歌い上げているのは、冷戦構造や独裁政治など、植民地からの解放以降も韓国社会を抑圧し続けてきた構造的暴力に対し、自立して闘う主体としての「民衆」の誕生だった。

87年「6月民主抗争」（大統領の直接選挙制改憲などを要求する民主化運動）の象徴である〈朝露〉は、71年に発表され、軍事政権による禁止にもかかわらず若者たちのフォークソングとして愛され続けた歌。行進曲風が多い一般的なプロテストソングとは異なり、伝説的なシンガー・ソングライター、キム・ミンギによる「大衆歌謡」としての魅力は、いわゆる「左派」や「学生運動」の枠組みを超え、一般の市民が民主化抗争に参加する過程で大きな役割を果たした。2002年の「在韓米軍装甲車轢（れき）死事件」（韓国で女子中学生2人が米軍の戦車にひき殺された事件）を機に始まった数々の「キャンドル集会」においても、〈朝露〉は韓国民主主義の象徴として歌われ続けた。

女性たちの手で

1970～80年代を代表する若者たちの大衆音楽が、時代を代表するプロテストソングとなった民主化の過程は、少女時代の歌とペンライト（アイドルを応援するグッズ）が象徴するいまの韓国民主主義に受け継がれている。少女時代のデビュー曲〈また巡り逢えた世界〉が若い女性たちのプロテストソングになったのは、朴槿恵（パククネ）大統領を弾劾・罷免に追い込んだ2016年の「崔順実（チェスンシル）ゲート事件」に火をつけた梨花女子大学での学内抗争。その後、若い女性たちは、さまざまな政治の現場で、新たな主役として存在感を増していった。つまり、少女時代の歌が、非常戒厳政局においてジェンダーや世代を超えたプロテストソングとして選ばれたのは、彼女たちが韓国民主主義の新たな主役になったからである。

ペンライトを手に大統領の弾劾を求める集会に参加した人たち＝2024年12月8日、光州市（栗原千鶴撮影）

韓国のノーベル賞作家ハン・ガン氏は、光州事件を描いた小説『少年が来る』を書きながら、「死んだ者（過去）が生きている者（未来）を救えるか」と問い続けたという。国会周辺に響き渡ったこの三つの歌はまさにその答え、つまり1980年の闘いが約50年間どのように受け継がれ、いまの闘いにつながったのかを示すものだった。それを可能にしたのは、背景や性格の異なる歌を時代のプロテストソングとして歌いながら、民主主義のために闘争し続けてきた民衆・市民・大衆の存在に他ならない。闘う者がいなければ、プロテストソングはそもそも存在しないのだ。

朝の風

今年は、日本で初めてラジオ放送が始まって100年だそうだ。ラジオを囲んで家族で聞いた時代から、一人で好きな番組を聞いたり、ハガキやメールなどで投稿したり、スマホのアプリで好きな時間にお気に入り番組を聞いたり、聞き方も多様だ。

筆者もアプリを使って、毎日寝る前にラジオ番組の朗読を聞くのが楽しみだ。

作品のジャンルはさまざま。声優や俳優たちの声が、物語の世界に引き込んでいく。

なかには、一人で老若男女の登場人物のセリフを見事に使い分ける朗読もある。そのような語りでは、性別や年齢・立場により、発声の仕方を巧みに変えていることに気づく。控えめで胸にこもったような遠慮がちな声は、優しい中年女性の姿が思い浮かぶ。滑舌のよい少し高い声は、若者らしい。

加えて、いじわるな気持ちや相手を見下したときの声からは、戸惑いなど感情のたゆたうさまを聞き取ることができ、登場人物のたたずまいや表情までも脳裏に浮かんでくるのだ。

声には、その人物の年輪や人柄、心の揺れがにじみ出てくるものだと改めて知った。

今日も、心の物語を表情豊かに語ってくれる「声」に会いたくてラジオを聴いている。（松）

ラジオで知る声の魅力

「外国人＝問題」という先入観

睡蓮みどり　あなたからはじまる　④

印象的な出来事があった。夫と1歳の子どもと近所を散歩していた時、小学生くらいの男の子とすれ違った。その子はじっとこちらを見つめ、私たちに向かって「家族なの？」と言った。「え、どういう意味だろう？」と思いながら、「そうだよ」と答えると、「だって、1人だけ日本人だよ」と。

なるほど。夫は白人で見るからに「外国人」のルックス。子どもの髪が茶色っぽいこともあり、その子にとっては「日本人」に見えなかったらしい。1人だけ日本人というのは、もちろん私のことだ。

その子の周囲にはこういうタイプの家族がいなかったのかもしれない。初めて見たのだとしたら、疑問に思っても自然なことだ。あまりに真っすぐな質問だった。何と答えるのが正解か迷いながらも、自分の子をさして「この子は日本人だし、オランダ人でもあるんだよ」と答えた。その子はポカンと不思議そうな顔をしていた。

§　§

前回、この原稿を書いた時はまだ首相が決まっていなかったが、その後、高市早苗氏が就任した。メディアで流れる高市氏の笑顔を見ると、どうしてもつらい気持ちになる。メディアで繰り返される「外国人政策」という言い方自体が、「外国人＝問題」という先入観を助長しているように感じる。何が差別かを理解していない人がまだまだ多いのだと、実感させられる。

でも、自分だって人のことは言えない。数年前まで、例えば「日本語上手だね！」というのが差別だとは思っていなかった。その後、夫に対するこの言葉を耳にタコができるほど聞くこととなった。無意識の偏見や思い込み、決めつけで誰かを傷つけてしまうことを「マイクロアグレッション」という。

高市政権になって以降、私には排外主義がさらに強まっているように感じられる。近所の定食屋でたまたま見たテレビ番組では、インバウンド観光客を「救世主か侵略者か」と議論していた。差別以外の何物でもない。ゾッとした。

§　§

先日、コメディアンの松元ヒロさんの舞台「ひとり立ち」を見に行った。旬な政治情勢を風刺たっぷりに語る。鉄板ネタの麻生太郎氏をはじめ高市氏も見事に再現。日本人優先を主張する勢力が、「日本人ファースト」と英語で訴える矛盾を突っ込む。排外主義を含む現政権への批判を織り交ぜつつ、観客を笑いの渦に巻き込んでいく。

日本では政治の話をカフェで気軽にできない。タブー視する風潮がある。でもあの場では、みんな声を出して笑い、怒りを共有できた。鬱屈した日々の中で、久々に笑うことができた。

舞台の帰り道、あの男の子のことを思い出した。私たちと話した後、不思議そうな顔で考え込み、「そっか！」と笑って、「バイバーイ！」と手を振って走って行った。あの子なりに、いろんな家族のあり方を発見した瞬間だったのかもしれない。あの笑顔を忘れたくない。そして、そんな発見がこの社会に少しずつ広がれば、と思う。

（すいれん・みどり　俳優・文筆家）

（毎月1回掲載）

波乱の生涯 社会と絡めて

映画

「TOKYOタクシー」（日本）

©2025映画「TOKYOタクシー」製作委員会

よわい90を超えてなお、創作意欲に衰えを見せない山田洋次監督が、おなじみの倍賞千恵子と木村拓哉を主演に迎え、戦後80年を彩る激烈ながらも心温まる人間ドラマを編み上げた。

娘の高校入学を控え、生活費もままならない個人タクシーの運転手・浩二は、東京・柴又から神奈川・葉山までお客を送るという仕事を受ける。乗り込んできたのは85歳のすみれ。ぶっきらぼうで早く目的地に向かおうとする浩二に対し、すみれは東京の街の見納めにと、思い出の場所を巡るように注文する。

2022年のフランス映画「パリタクシー」を原作に、舞台を東京に置き換えて、タクシー内での会話から高齢女性の数奇な人生を振り返る。戦後、在日朝鮮人の青年と恋に落ちたすみれは息子を授かるが、恋人は帰還事業で北朝鮮に渡った後だった。彼女はやがて好意を寄せてくる男と結婚するが…、という波瀾（はらん）万丈の物語が、蒼井優がすみれを演じる回想場面を織り交ぜながら展開される。

大筋は原作通りだが、個人史に絡める形で戦後日本がたどった社会の表層を巧みに組み込む。家父長制に基づくかつての日本は女性には極めて生きづらく、絶対に後戻りさせてはならないとの山田監督の強い信念がにじむ。一方で介護施設のそっけない対応など、現代社会の人情味の薄さを指摘することも忘れない。

回想シーンのくすんだ色味や小津安二郎張りのローアングルなど、工夫を凝らした映像美も見逃せない。

（藤井克郎・映画ジャーナリスト）

21日から全国で公開

読者の文芸

詩は原稿用紙に20行以内縦書き、短歌、俳句、川柳は、はがき（５首・句以内）で、表に分野の区別を朱記。二重投稿はご遠慮ください。郵便番号、住所、氏名、電話番号明記。紙上匿名は自由。あて先は　〒151-8675　東京代々木郵便局私書箱62号、赤旗学術・文化部「読者の文芸」係。メールでも投稿　akahata-bungei@jcp.or.jp（件名に分野を明記）掲載作に図書カード贈呈。

川柳　新家　完司 選

立ち上がり遅いパソコン似る我が身　札幌市　鈴木　英雄

〈評〉目覚めてもすぐには起き上がれず、しばらくぼんやり。大あくびしてようやくむっくり。スイッチオンしてもなかなか立ち上がらない古いパソコンそっくり。

百名山踏破をクマに阻まれる　仙台市　髙橋　敏

生きるとは闘うことぞイバラ道　埼玉県　森井　征之

庶民には災害級の物価高　大阪府　折田　和喜

生活にもう木枯らしが吹きつける　福島県　佐藤　隆貴

平凡に過労死せずに生きて古希　神奈川県　本間　勝

おでん鍋飽きずに老いてふたりいる　宮城県　高橋　卓也

俳句　三宅やよい 選

名月や金継走る青磁碗　京都府　矢野　紫月

息吐けば足透く思ひ山の霧　京都府　山内　利男

白湯ふくみ頁めくれば火の恋し　奈良県　渡辺　則之

稲の秋父を施設に送る道　大分県　原田ふづき

むく群れて塾の灯はやも煌々と　相模原市　芝岡　友衛

短歌　大井　学 選

両の手は花を握って離さない武器を持つ手はここにはなくて　札幌市　橘　晃弘

〈評〉「ここ」が〈わたし〉を指すだけでなく、この地域、日本、世界の全てであってほしい。作者の祈りが「ここ」にある。

権力に集る輩をただただただ垂れ流すテレビ思いっ切り消す　横浜市　藤田　太郎

〈評〉なぜ権力を欲するのか、その目的すら明確でない政治屋の姿を多く見せられている。「切り」はテレビの新たな縁語。

こころには傘を差し得ずやわらかい光の方へ手をかざしたり　大阪府　巽野　千冬

コスモスを淋しき色と言う君の心の色は何色ですか　山口県　吉岡日出樹

ありがとうありがとうを日に幾度もと病む友の笑むコスモス揺れる　東京都　岩井美代子

不揃いのコップもありし月見酒　宮城県　菅原　和子

〈評〉秋の主役はなんといっても月。月をともにめでようとふらっと訪ねてくる月見客に出す酒のコップが不揃いなのも味のうち。

名月や金継走る青磁碗　京都府　矢野　紫月

息吐けば足透く思ひ山の霧　京都府　山内　利男

白湯ふくみ頁めくれば火の恋し　奈良県　渡辺　則之

稲の秋父を施設に送る道　大分県　原田ふづき

むく群れて塾の灯はやも煌々と　相模原市　芝岡　友衛

詩　Pippo（ぴっぽ） 選

千年の釘

愛媛県　新見かずこ

奈良の薬師寺には東塔と西塔が立っている
東塔は白鳳時代に建てられた国宝だ
西塔は焼失して昭和に再建された
展示資料のなかに
西塔再建の際の「千年釘」の話があった
「白鷹幸伯」が制作した和釘のことだ
宮大工棟梁に「千年もつ建物を造るので千年もつ釘を作ってください」と依頼される
鍛冶職人のプライドで和釘を打ち続けた
先の先まで見通す　職人気質に頭が下がる
効率ばかりを優先して
目先の利益のみを追求する今の世の中
大いに反省せねば…
未来のために　子どもたちのために
将来の世の中を想像して行動すること
原点に立ち返らないと　気候変動を含め
世界が大変なことになりそうだ

〈評〉新見さん、役目を全うせんと千年を生きる「千年釘」。深謀遠慮を忘れぬように、と作者が我々に手渡してくれた尊い釘のように思えてくる。

予期せぬ出来事

滋賀県　蓼科　初子

人生の終盤にさしかかったというのに
予期せぬ出来事で
眠れぬ夜が続く
「あなたは重要参考人」
「守秘義務」
などの言葉が脳みその中をグルグル回って
私の異常を感知した親友の言葉かけで
それが詐欺だと知る
ものごころついた頃から
夢見がちに思い描いていた私の歩く道
現実は予期せぬ事の連続
喜びも　悲しみも
ひとりでは　やっぱり生きてはいけない
どんなに窮地に陥っても

蓼科さん、予期せぬ出来事に遭った際に異変を察知してくれる人の有り難さ。誰かのそのような存在でありたい、と願ってしまうような詩。